

6、7世紀の集落動向 ―元岡・桑原遺跡群を中心に―

福岡市文化財活用部 菅波 正人

1. はじめに

今回の講座では、「庚寅銘大刀」が副葬された元岡G-6号墳が築造された時代を、元岡・桑原遺跡群の6、7世紀の集落の移り変わりから考えていく。

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。九州大学統合移転に伴い、平成8（1996）年度から移転用地の275haについて試掘調査、平成9（1997）年度から発掘調査を実施した。これまで旧石器時代から中世にいたる様々な遺構、遺物が発見されている。

遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された花崗岩を基盤とし、高さは標高100m前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。遺跡群の北側を流れる大原川流域を除くと、平野はほとんどなく、弥生時代以降、集落は主に谷部に営まれている（第1図）。

遺跡のある地域は古代では志麻（嶋）郡に属する。日本書紀には、推古10（602）年、来目皇子が新羅を討つために撃新羅将軍に任命され、二万五千の軍衆が筑紫の嶋郡（現在の福岡市の一部と糸島市）に駐屯したと記されている。当時の筑紫の地は、ヤマト政権における外交、防衛の重要な拠点であり、勢力を強めてきた新羅に対する軍事的前線基地としての役割を持っていた。その中でも嶋郡は最前線と言える場所であった。本遺跡群では古墳時代から古代にかけて、6基の前方後円墳と70基余りの後期群集墳、百数十軒を超える竪穴住居跡、古代の大規模製鉄遺跡などが確認されており、最前線であった様相を知る上で重要な遺跡といえる。

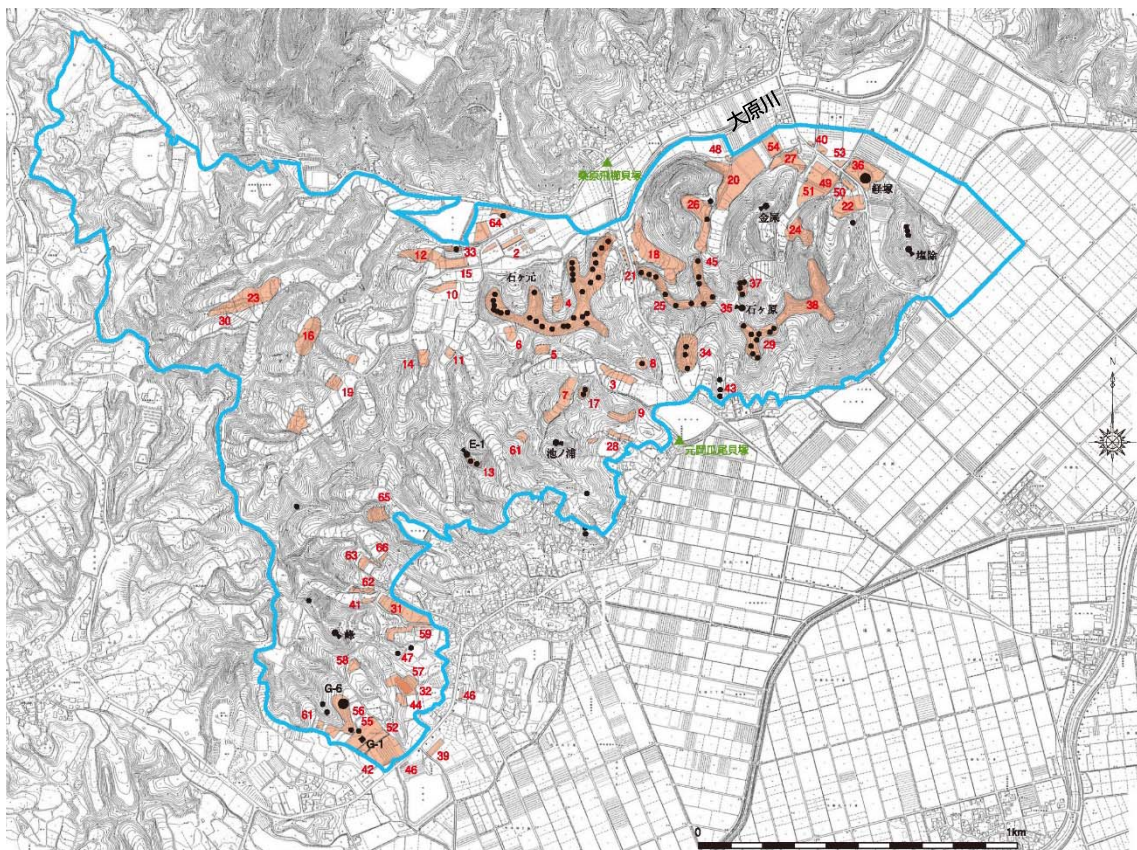


図1 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図

2. 古墳時代の元岡・桑原遺跡群

古墳時代の遺構・遺物は前半期から見られるが、後半期には石ヶ原古墳などの大型の前方後円墳が築造されるとともに、桑原石ヶ原古墳群などの群集墳や集落が増加する。

(1) 古墳の動向

①前方後円墳・大型円墳

本遺跡群では前方後円墳6基、大型円墳1基が確認されている。このうち、前方後円墳は桑原金屎古墳、元岡E-1号墳、元岡石ヶ原古墳、大型円墳の経塚古墳の調査が行われている。

金屎古墳は、水崎山から北側に延びた狭い丘陵尾根上に立地し、墳頂部の標高は約54mを測る(図2)。墳丘規模は全長23.8m、後円部径12.4mを測る。古墳の西側には南北約11m、東西約8.5mの長方形の古墳が取り付く。後円部中央の埋葬施設は割竹形木棺を納めた粘土槨で、長さは2.7m、幅は50～58cmを測る。頭位は西で頭部付近両側に、銅鏡2面が副葬されていた。築造時期は4世紀末～5世紀初頭と考えられる。

元岡E-1号墳は、標高60m程度の舌状丘陵上に立地する。墳丘規模は全長35m、後円部径22m、前方部長15mと推定される(図2)。前方部・後円部共に2段築成で、葺石などの外表施設はない。内部主体は木棺直葬の粘土槨と考えられるが、遺存状況が極めて悪い。主体部からは青銅製方格T字鏡1面が出土した。出土遺物は鏡のみで築造年代は明確ではないが、4世紀後半代と考えられる。

石ヶ原古墳は水崎山から北西に向かって延びていく標高70m程度の狭い丘陵尾根上に立地する(図3)。ここから北に連なる舌状丘陵の先端には金屎古墳が、南及び西側の連なる丘陵上には元岡古墳群J群、同N群、桑原古墳群A群などの群集墳が所在する。墳丘規模は全長49m、後円部径23m、前方部長26mを測る。埋葬施設は両袖式単室の横穴式石室で、南側に開口する。石室はほとんどの石材が抜き取られ、現状では腰石及び右隅角の一部が残るのみである。右側壁長3.6m、奥壁幅2.1mを測る。古墳の年代は出土した土器などから6世紀中葉に築造され、6世紀後半まで追葬されたものと考えられる。

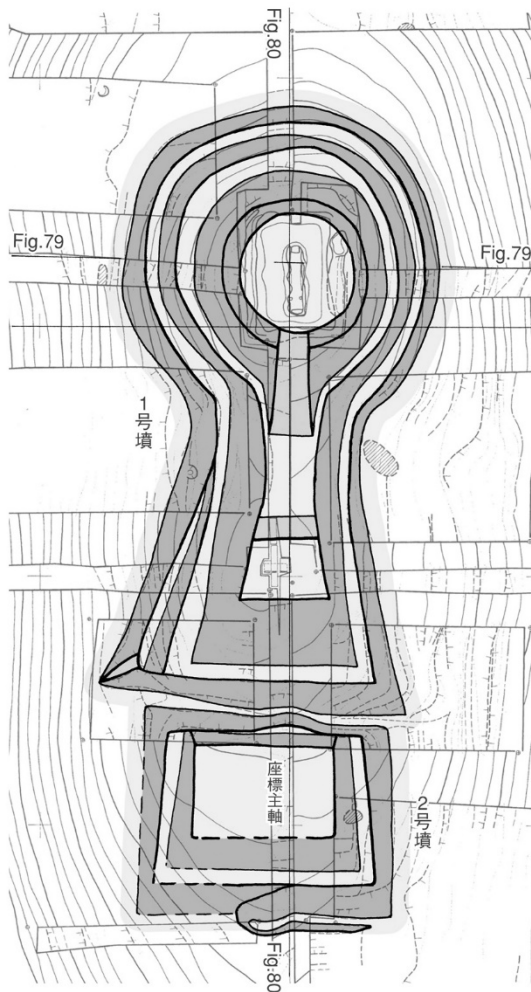
経塚古墳は遺跡群の東端にあたる標高10mほどの丘陵の先端に立地する(図3)。古墳は直径30m、高さ3mを超える大型の円墳である。墳丘には葺石が葺かれている。墳丘から円筒埴輪や形象埴輪(家形)などが出土しており、墳丘の頂部に埴輪が設置されていたと考えられる。主体部は未調査であるが、初期横穴式石室と考えられ、5世紀中ごろに造られたと推測される。

②群集墳

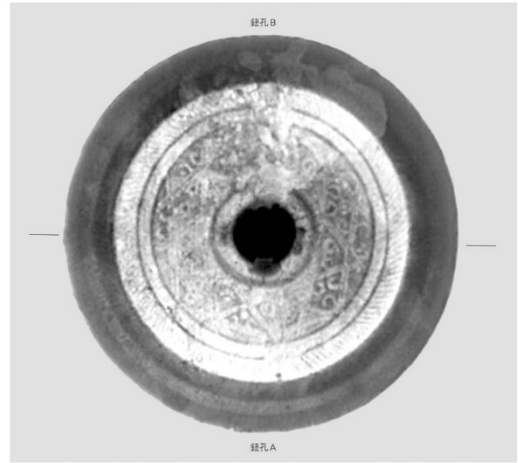
遺跡群には70基あまりの群集墳が確認された。その中で最も多く分布し、総基数は32基を数えるのが、桑原石ヶ原古墳群である(図4)。古墳群は標高15～60m程度の舌状丘陵上に立地している。古墳群の規模は10m前後から～20m程度の円墳で、内部主体は横穴式石室である。この古墳群の築造は5世紀中葉には開始されたと考えられ、6世紀中ごろから造墓活動が盛んになる。8世紀代までの追葬が認められるもの一部見られる。

古墳からは多くの遺物が出土している。須恵器、土師器の他、7号墳と9号墳の墳丘からは、陶質土器の壺が出土した。鉄器は鎌・太刀・弓金具などの武器の他、鋸・刀子などの工具類が出土した。半島産の鉄矛も出土している。8号墳石室からは金銅装単鳳環頭太刀が出土した。馬具には轡・雲珠・杏葉・鞍金具・輪鏝や銅製馬鐸・馬鈴などがあり、鉄地金銅張のものもある。装身具類には耳環類、ガラス製玉類、碧玉製管玉、翡翠製勾玉、土製練玉などがある。人骨が出土した古墳は2基のみであったが、遺存状況は良好でなかった。製鉄関連の遺物としては12号墳石室から鉄製鍛冶工具一式(金床・金鋏・金槌2点)が出土した。他の古墳のいくつかには、鉄滓や砥石が出土している。

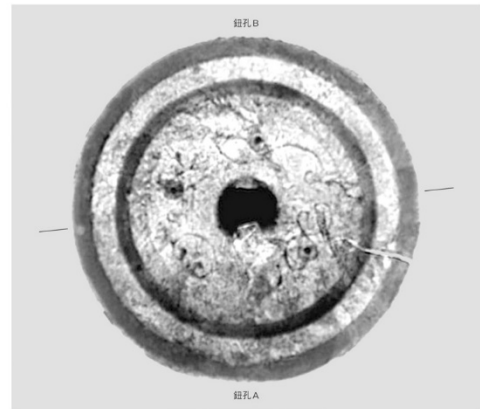
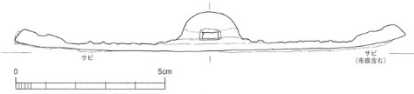
本古墳群には鉄製鍛冶工具一式をはじめとした製鉄関連遺物や半島産の土器や武器などが出土しており、半島系の工人集団などの存在を窺うことができる。



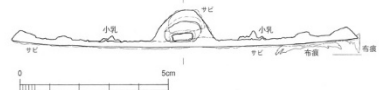
金屎古墳墳丘復元図



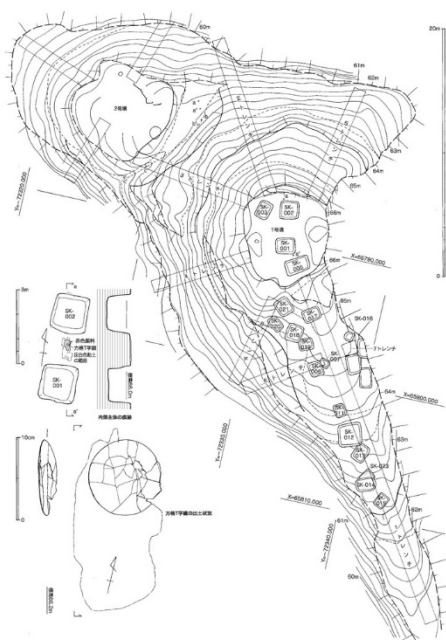
Ph.1 菱窓紋鏡X線写真(実大)



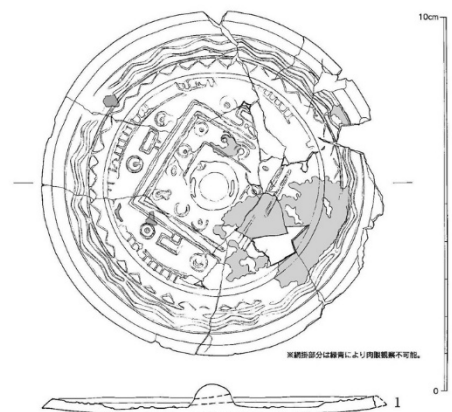
Ph.2 芝草紋鏡X線写真(実大)



金屎古墳出土銅鏡X線写真

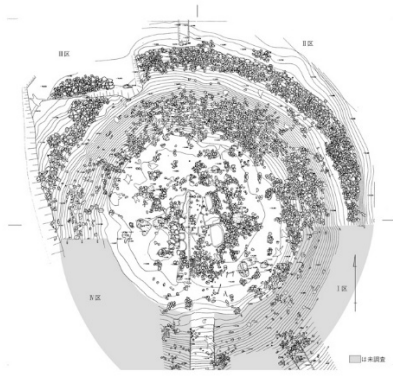


元岡E-1号墳墳丘測量図



元岡E-1号墳出土銅鏡実測図

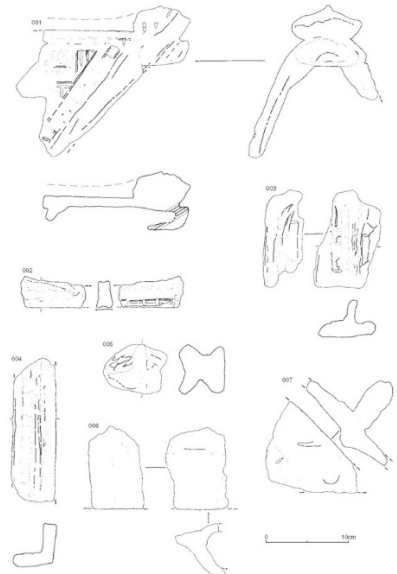
図2 金屎古墳、元岡E-1号墳遺構・遺物実測図



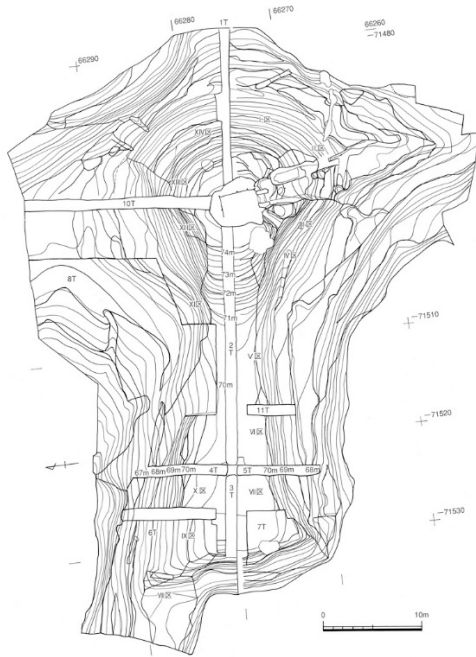
経塚古墳墳丘測量図



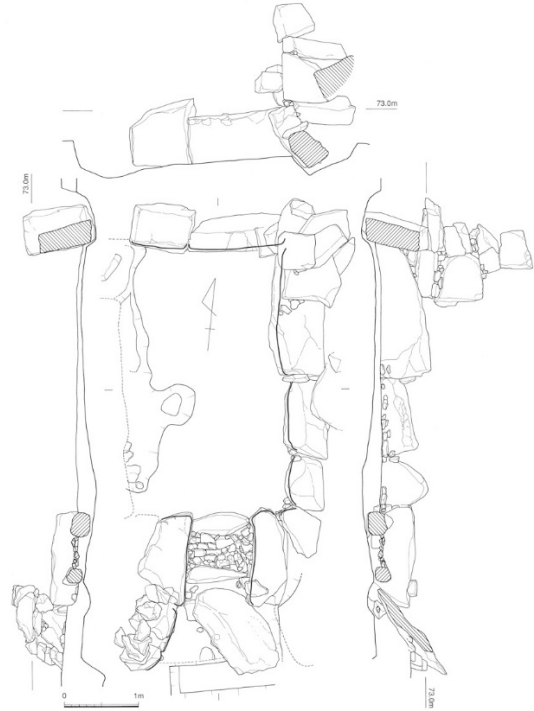
経塚古墳全景（上：北から、下：東から）



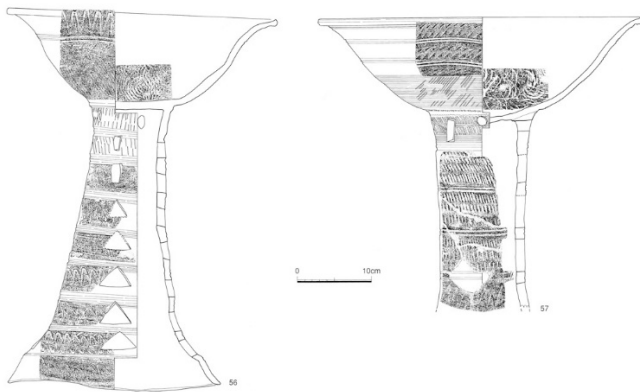
経塚古墳出土家形埴輪実測図



石ヶ原古墳墳丘測量図



石ヶ原古墳石室実測図



石ヶ原古墳出土遺物実測図

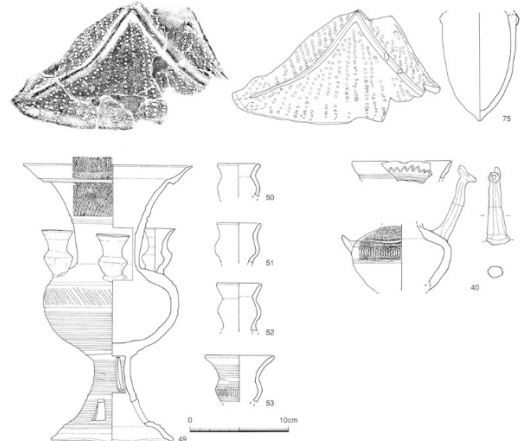
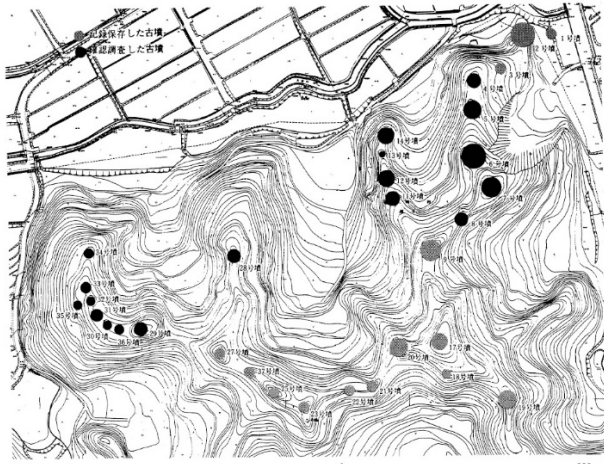
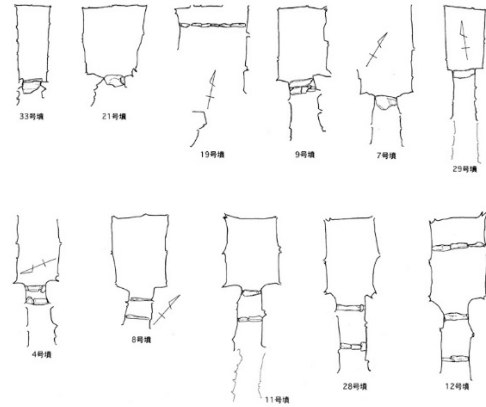


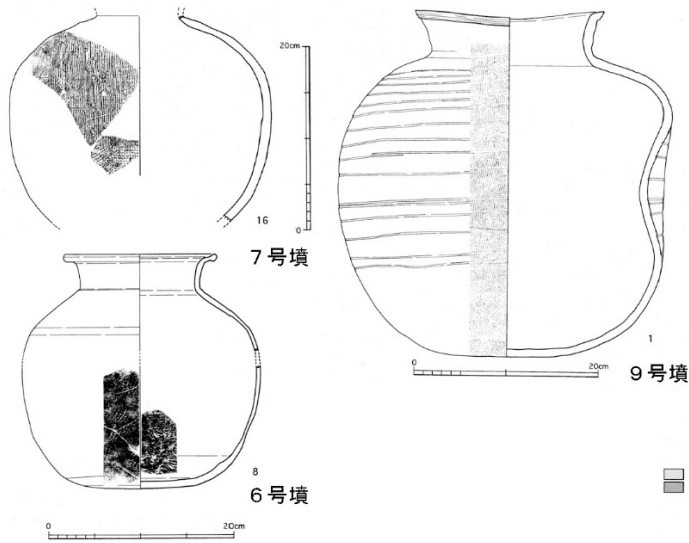
図3 経塚古墳、石ヶ原古墳遺構・遺物実測図



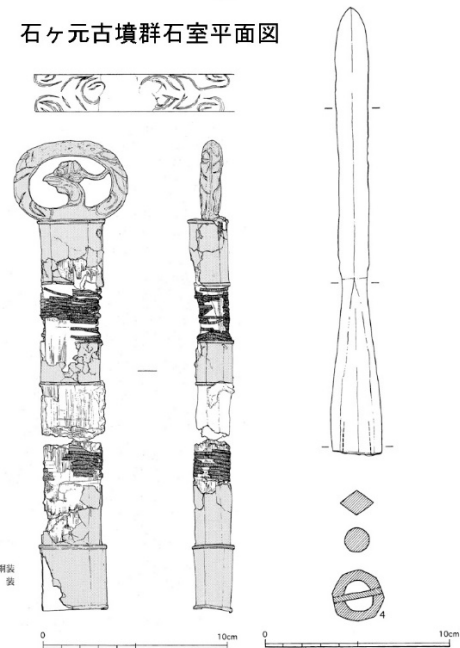
石ヶ元古墳群分布図



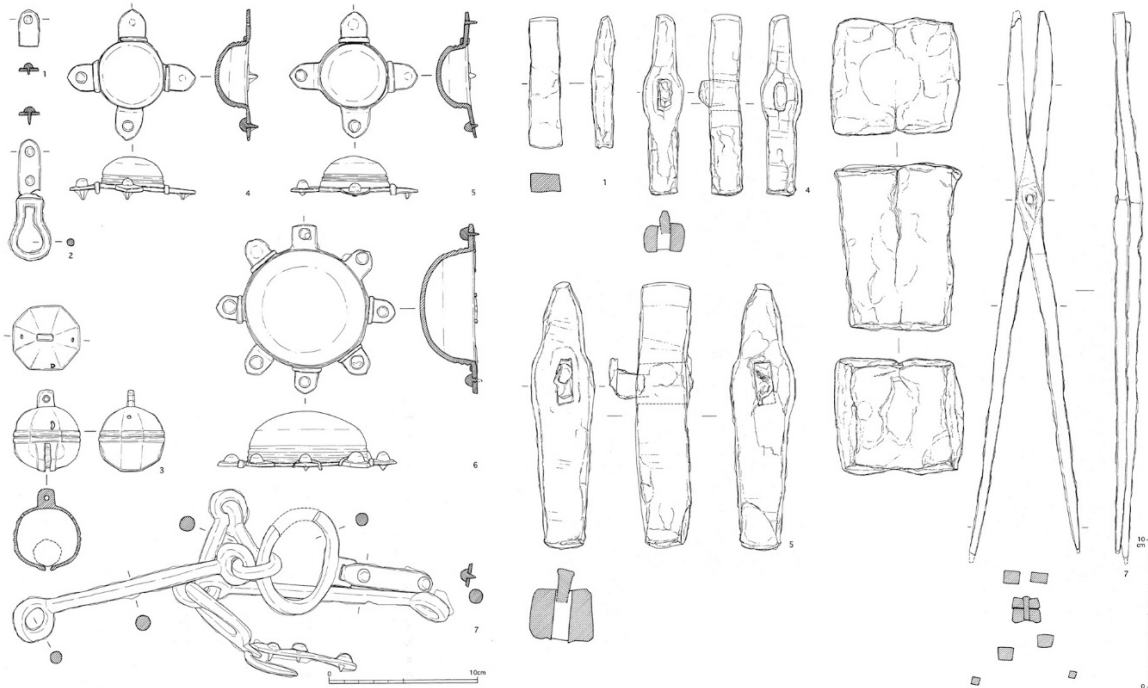
石ヶ元古墳群石室平面図



石ヶ元古墳群出土陶質土器



8号墳出土単鳳環頭大刀及びび鉄矛



12号墳出土馬具（左）及び鍛冶道具（右）実測図

図4 桑原石ヶ元古墳群遺構・遺物実測図

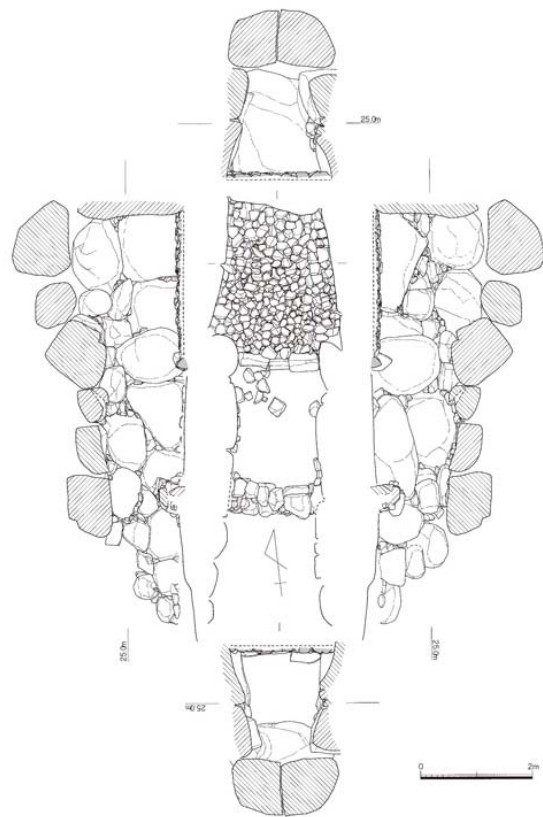
元岡古墳群G群は元岡・桑原遺跡群の南端に位置する古墳群で、6基の古墳で構成される(図5)。G-1号墳は方墳で、大きさ・形は一辺18mの正方形である。石室形態は両袖式単室で、玄室の規模は長さ3.6m、幅2.1mで、元岡・桑原地区の古墳の中では最大である。主な出土品として、鉄刀5本、圭頭把飾、鉄鏃、胡籙金具、馬具、銅鏡、銅釧、耳環、玉類、須恵器などが挙げられる。古墳の築造時期は出土遺物より6世紀末から7世紀初頭と考えられている。

G-6号墳は直径18mの古墳で、主体部は石室全長7.5m、玄室長2.5m、玄室高1.8m、玄室最大幅2.4mの両袖式単室の横穴式石室で、玄室・羨道は攪乱を受けておらず、副葬品は原位置をとどめて検出された。副葬品は金象嵌銘入大刀(『庚寅銘大刀』)の他、鉄矛、弓金具、馬具、工具(鉄斧・鉄鋸・鉄鑿・鉋)が出土しており、閉塞石積み内から大型青銅鈴が出土している。古墳の築造時期は出土遺物より7世紀初頭と考えられている。

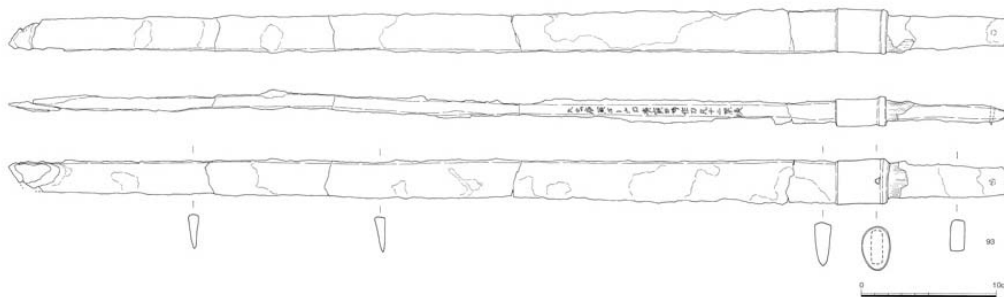
G-1、G-6号墳の被葬者像は古墳の形態や副葬品などの様相から中央政権との関係が指摘されており、前述の桑原石ヶ原古墳群の被葬者像との相違が注目される。



元岡G古墳群古墳分布図



元岡G-6号墳石室実測図



元岡G-6号墳出土庚寅銘大刀実測図

図5 元岡G-6号墳古遺構・遺物実測図

(2) 集落の動向

遺跡群の北側に位置する第20次、27次調査地点では100軒以上の竪穴住居を検出した(第6図)。周囲に金屎古墳、経塚古墳、石ヶ原古墳などの前方後円墳、大型円墳が分布することから、この地域の拠点となる居住域と考えられる。竪穴住居は5世紀代から営まれ、7世紀までの長期にわたる。調査区北側中央に幅20m、長さ50mを超えるため池SX044があり、5世紀～7世紀の各時期の土器、木器(農耕具、建築部材等)、動物骨(馬)などが多量に出土した。注目されるのは完形の土器(土師器の小型丸底壺、須恵器杯)、子持ち勾玉や滑石製の小玉、大刀などで、水場の祭祀に使用されたと考えられる。更に、桑原石ヶ元古墳群でも見られた鍛冶道具や陶質土器なども出土しており、半島系の工人集団の居住も想定される。

第20次調査地点東側の丘陵を挟んだ谷部に位置する第49次、51次調査では、中央を蛇行しながら流れる河川の両側に営まれた、6世紀後半から7世紀初めの竪穴式住居跡14棟と8世紀初めまでと考えられる掘立柱建物72棟を検出した(図9)。また、河川から柱やネズミ返し、扉などの部材が出土した。この地点は第20次調査地点と異なり、竪穴住居の造営開始は6世紀後半で、特に7世紀初頭から後半にかけては、1×1間や2×2間の総柱建物が密集して営まれている。それぞれの建物は小規模であるが、一定範囲に継続して倉庫群が営まれる。

同様の構造は第7次、第18次調査地点でも見られ、集落の開始時期や河川の両岸に倉庫群が営まれるようになるなど類似点が多い(図7)。竪穴住居より倉庫が多いことから居住域というより、独立した倉庫域と見做すことができる。

一方、手工業生産に関しては、第24次調査では7世紀前半代の竪穴住居からふいごの羽口が、第20次調査では鉄製の金槌や鑿、桑原石ヶ元古墳群第12号墳からは鍛冶道具が出土しており、鉄器の生産が行われていたことが想定される。また、第18次調査では須恵器系土師器に見られる当て具痕に類似した木製の当て具が出土しており、土器の生産も行われていたことも想定される。さらに、第18次、20次調査では古墳時代の河川から馬の歯や木製の鞍、壺鐙なども出土しており、馬の飼育もおこなわれていた可能性も推測される(図8)。

このように6世紀後半から7世紀にかけて、集落構造や手工業生産などにおいて大きな画期が認められる。それはこの地域が当該期に百済支援の軍事的拠点であったことと関連した現象と捉えることができよう。更に、この画期は那津官家の設置を契機とする地域の再編成の一環として、博多湾沿岸地域全体で捉えるべきものであろう。

3. 博多湾岸における6、7世紀の遺跡の動向

元岡・桑原遺跡群での画期について、博多湾岸の遺跡の動向から考えてみたい。

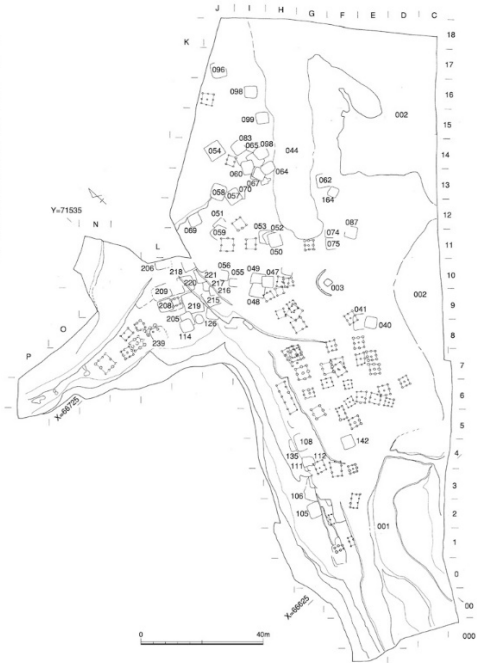
博多湾沿岸の7世紀の集落遺構の分布を見ると、竪穴住居跡主体とする集落構造には変化はないものの、6世紀代に増加した住居跡等の遺構は7世紀以降、減少する傾向が見られる。その一方で、那津官家との関連が指摘される博多区比恵遺跡群や早良区有田遺跡群では、6世紀後半に特徴的な大型倉庫群の造営が始まり、7世紀以降も継続していく。隣接する博多区那珂遺跡群でもこの時期と考えられる大型倉庫群が出現し、牛頸窯産と考えられる瓦が見られるようになる(図10)。

(1) 那津官家の設置と集落構造の変化—比恵・那珂遺跡群—

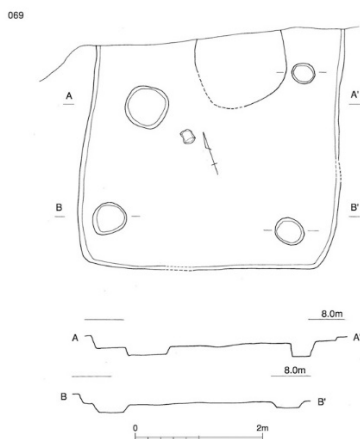
比恵・那珂遺跡群の5世紀代においては、それ以前の様相と異なり、遺構・遺物が極端に少なくなり、集落の衰退期と考えられている。6世紀中頃に那珂遺跡群北側に東光寺剣塚古墳が築造されると、遺跡群では井戸などの遺構が見られるようになり、集落の再開発の様相を呈するようになる。これに連動するように、6世紀後半には比恵遺跡群では那津官家に関連する遺構群が出現しており、これらの状況はこの地域において大きな



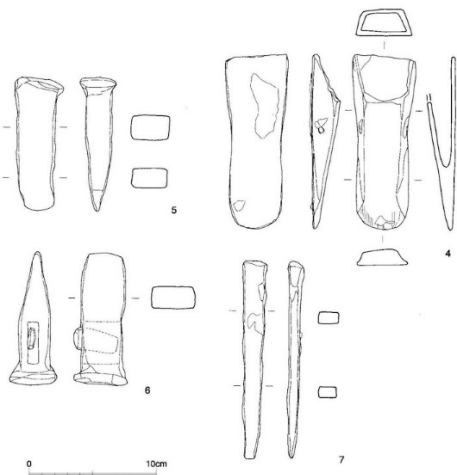
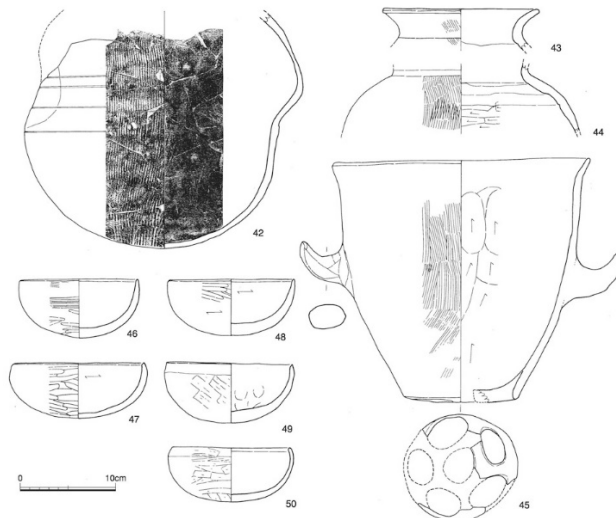
元岡・桑原遺跡群第20次調査周辺古墳時代遺構分布



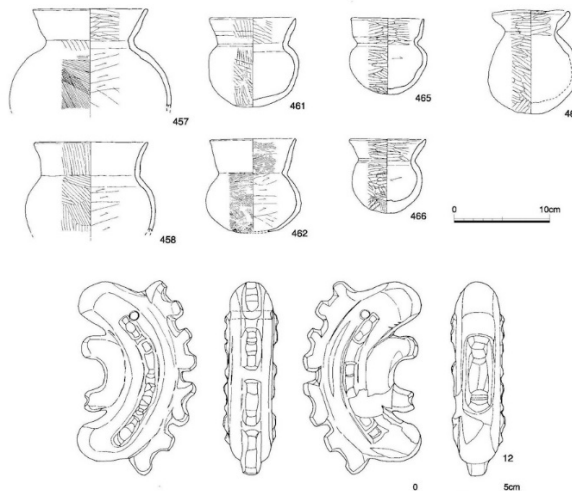
20次調査古墳時代遺構分布図



第20次調査SC069及び出土遺物実測図



第20次調査出土鉄製品実測図



第20次調査SX044出土土師器及び子持勾玉実測図

図6 元岡・桑原遺跡群第20次調査地点遺構・遺物実測図

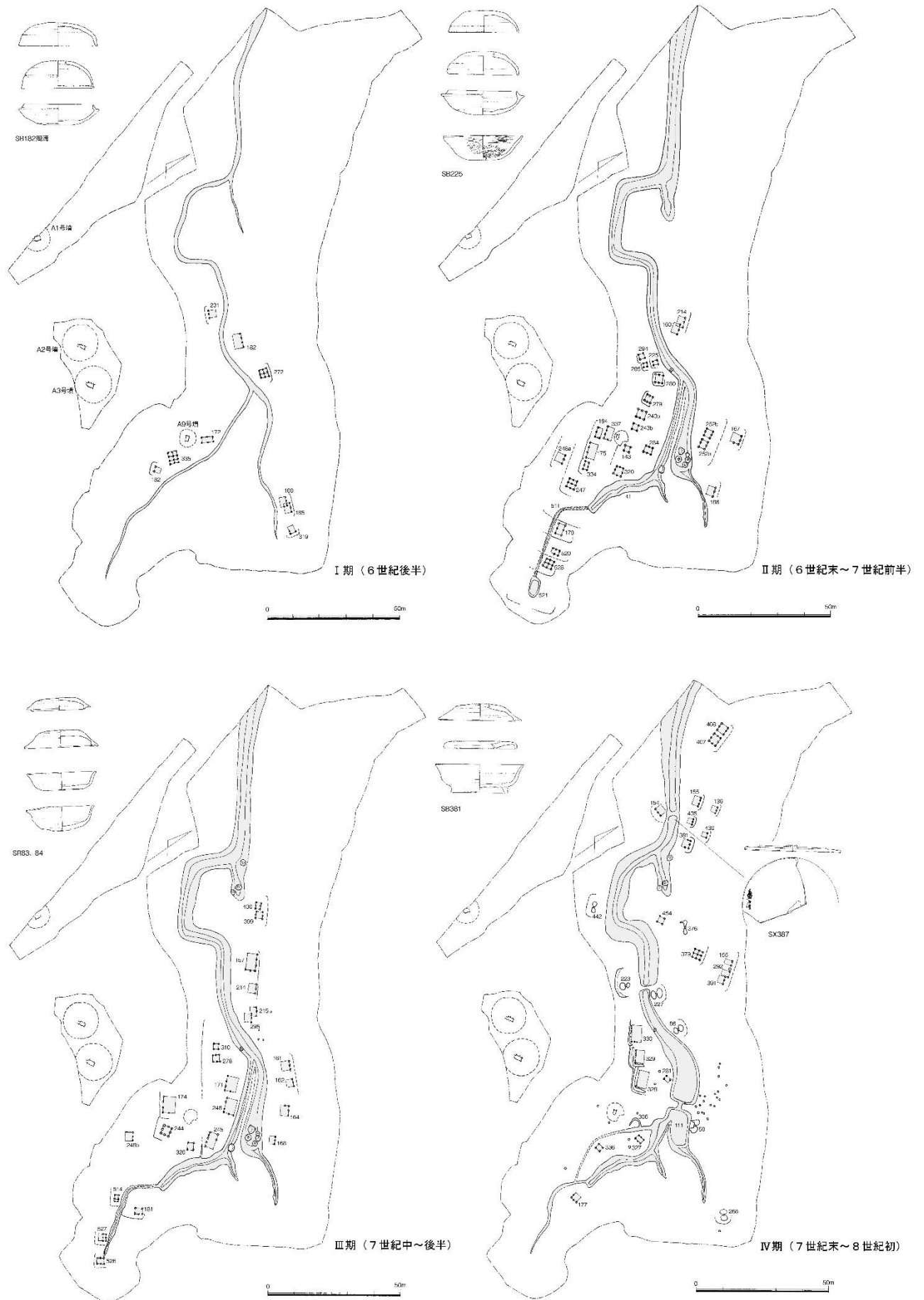


図7 元岡・桑原遺跡群第18次調査地点遺構・遺物実測図

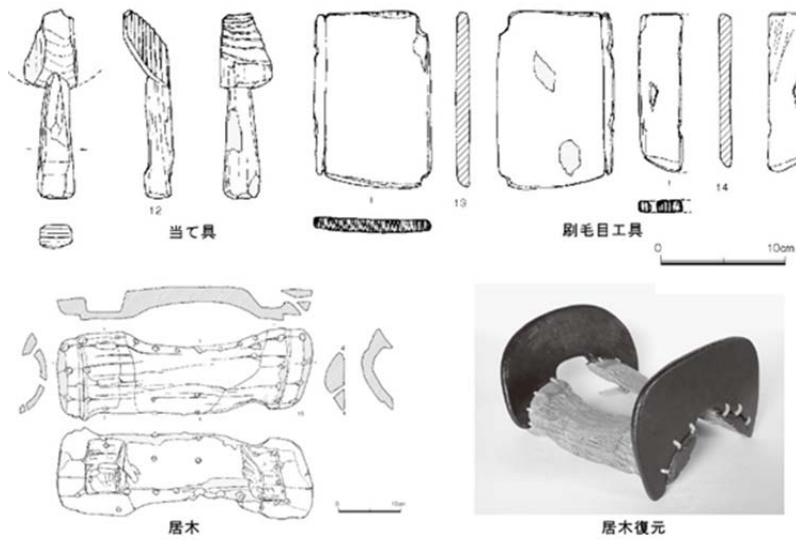


図8 元岡・桑原遺跡群第18次調査出土遺物実測図

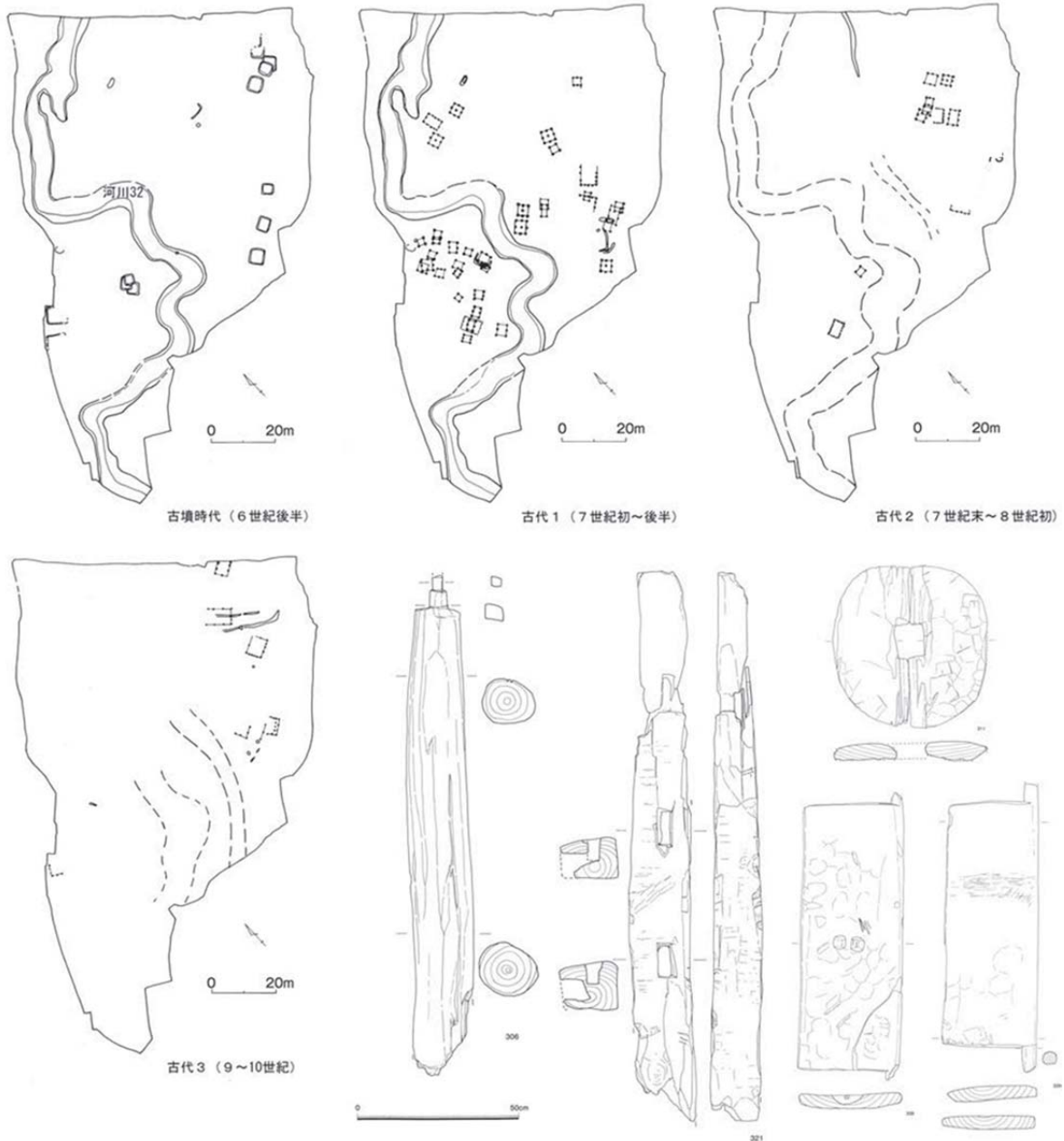


図9 元岡・桑原遺跡群第49・51次調査遺構・遺物実測図

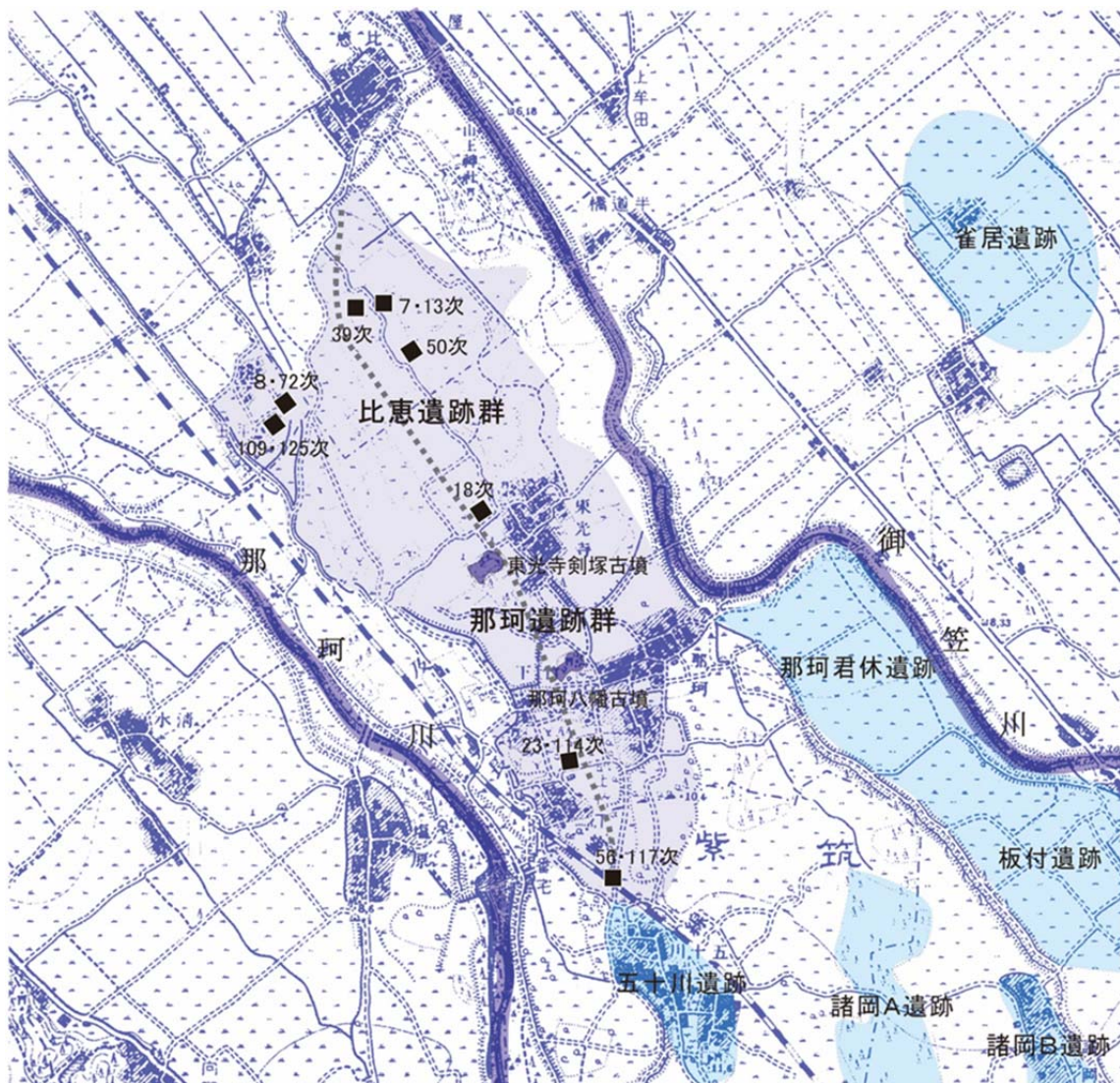


図10 比恵・那珂遺跡群主要遺構分布図

画期と捉えられている。7世紀中ごろから後半になると、遺跡群では竪穴住居跡は見られなくなり、大型建物や区画溝、牛頸窯産の初期瓦が出土ようになる。このような遺構・遺物の様相から、那津官家から繋がる公的な施設や外交使節の招来などに関係した施設の可能性が推測される。那津官家の設置は、ヤマト王権の地域・対外拠点の整備に連動しているもので、博多湾岸の遺跡の在り方にも大きく影響していると考えられる。

(2) 生産体制の集約化

6世紀後半以降、博多湾沿岸では鉄生産や須恵器生産に関して、集約化の様相がうかがえる(図11)。

鉄生産に関しては、古墳や集落から出土した鍛冶道具や鉄滓の金属学的分析等により、6世紀後半には製鉄から鍛冶にいたる一連の操業が行われていたと考えられている。福岡市域の早良・糸島地域は6世紀後半以降、鉄滓を供献した古墳が多数見られるようになることから、製鉄に関わる集団の存在が想定されている。

須恵器生産に関しては、福岡市内では5世紀末～6世紀前半には西区新開窯跡や早良区重留窯跡などの須恵器窯跡の操業が始まる。6世紀中頃になると、大野城市牛頸窯群の操業が始まり、6世紀末から規模は拡大していき、須恵器生産は牛頸窯で一局集中となる。

これらの背景には、「那津官家」の設置を契機とした博多湾岸地域の拠点整備に連動するものであり、増加する物資の需要に対応した、工人集団の再編、生産体制の集約化と推測される。

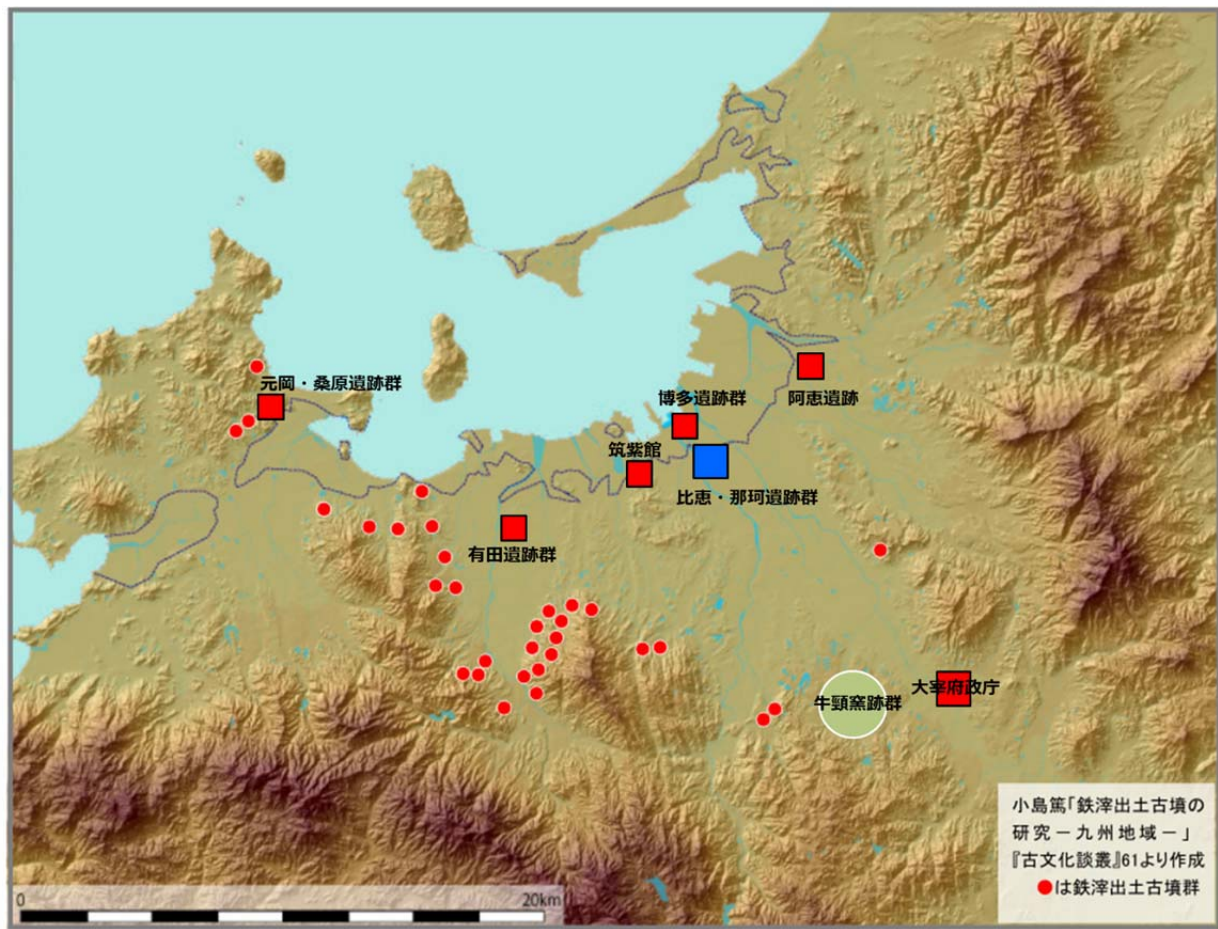


図11 博多湾沿岸の古墳後期～古代の主な遺跡分布図

4. おわりに

今でこそ、遺跡群の前面は干拓で陸地化しているが、古代においては海岸が入り込んで、眼前には潟湖が展開していたと考えられる。可耕地はそれ程多くない場所に多くの前方後円墳の分布することは、その潟湖との関わり抜きには考えることができない。対岸にあたる今宿地区も同様で、十数基の前方後円墳と500基余りの群集墳からなる今宿古墳群があり、これらのあり方は、良好な港を確保し、海上交通を駆使した勢力の存在を示すものであろう。この地域が外交、防衛の拠点として重要な役割を持った背景には、この地の自然環境とそれに深く関わった人々の存在抜きには語る事ができない。

今回の講座では「庚寅銘大刀」が副葬された元岡G-6号墳が築造された時代を考える上で、元岡・桑原遺跡群の集落動向を取り上げ、その時代に大きな画期があったこと、それが那津官家の設置を契機とする博多湾岸地域の再編にも関わるということを述べてきた。

筑紫の地は磐井の乱以後、ヤマト王権にとっての外交、防衛の重要な拠点として、那津官家の設置など博多湾岸地域の再編に力が注がれている。中でも鳴郡が位置する糸島地域は、百濟支援のための軍事的拠点としての役割を持っており、最前線と言える場所であった。「庚寅銘大刀」が副葬された元岡G-6号墳を含む、元岡G古墳群はヤマト王権との関連が指摘されているが、王権は在地の勢力を取り込んでこの地の拠点化を図ったのであろう。この場所は奈良時代においても、対新羅政策に関わる大規模な製鉄の操業が指摘されており、以後もこの場所が東アジアの対外関係の中で重要な役割を果たしていくことになる。